

「宙のほとりの私たち」

春日 彩花

あ、私もう駄目かもしれない。そう思った途端に見たくなつたのは、市役所通りの桜並木だった。そう思った途端に見たくなつたのは、年齢を重ねたせいとか、ここ数年、月日が経つのが恐ろしく早い。秋に公開予定の作品の撮影スケジュールがおおしていたこともあり、気付けば八ヶ月ぶりの帰郷だ。右手に父の好物である有名店のどら焼きの紙袋と、三日分の荷物の入ったキャリーケース。左手にはJRからバスに乗り換える間に買った缶ビールを持って、私は一週間前に思い描いた通りの景色のなかに降り立った。バス停から今来た道を振り返って眺めると、頭上に膨らむ五分咲きの薄桃色が、いくつかの信号を越えてもまだずらりと続いている。公的機関や個人商店、ファミレス、農協の並ぶ、ゆとりのある歩道に、片側一車線の国道十六号へと伸びる車道。桜の見物を兼ねるドライブパーも多いか、自動車の流れは緩やかだ。端を茜色に染め始めた目に沁みるような青空に、ソメイヨシノの凜とした佇まいが映える。心を洗い流してくれるような清廉とした美しさと、人々の暮らしを感じる町並みの調和。これまで数多くの桜の名所を見てきたけれど、私はこの場所の桜が一番好きだ。幼い頃はこの桜並木の終わりが目視できないことを、とても不思議に思っていた。ふわふわでピンク色の果てしないトンネルは、まるで桜の王国の入り口みたいで。この通りを歩行者天国にして行われる桜まつりでの露店や出し物で賑わう人々、着飾った鼓笛隊の子供たちの行進は、さながら王国の春を祝うパレード。どこかから桜の花びらでしつらえたドレスを着たお姫様や、枝でできた剣を携えた王子様が現れるのではないか。そんな幼い空想をしながら、両親と三人で手を繋いで花見がたらに歩いた。思えば、あの頃から私は物語を想像するのが好きだったのだ。そうやって目にしたものから連想したり、画用紙にクレヨンで絵かきしながら夢中になって物語を考えるのは、映画やドラマを作る映像監督になったアラフォーの私が大量のメモ書きやアイデアを殴り書き、プロットやコンテをきって作品を企画、制作していく過程とさほど変わらないようで、なんだか可笑しい。ふいに微かな柏餅のような香りが鼻先をくすぐる。きつとこの香りだって、当たり前前にあの頃と何ら変わっていないのだから。

私は手の中で随分と汗をかいた缶ビールのプルタブを上げると、ひといきに半分ほどをおおった。ぐくぐくと喉が鳴る音の向こうに、横断歩道の蒼色を知らせるピヨピヨという、のどかな音声が聞こえる。

普段は一人で外を歩きながら酒を飲むことなんてないし、かといって花見だからというほど楽しい気分でもない。けれど素面でもいられなくて、私はものの五分ほどで缶をあけてしまった。本来なら、今日、精密検査の結果を聞くために病院に電話をかけるはずだった。

しばらく健康診断やがん検診を疎かにしてしまっていたことに自覚はある。映像制作の専門学校を卒業したての頃は昼夜を問わずがむしゃらに現場で助手として働きながらも、年に一度は必ず検診に通っていた。私が高校二年の春に、母がある病で亡くなったからだ。

あの頃はまだ、近親者に同様の病になった者がいるかという問診票の質問に答える瞬間にも緊張感をもっていた。実際のところ、するかどうか定かではない遺伝という言葉をも、インターネットで検索してみた過去だつてある。けれど、仕事で認められることが増え、業界内で自分の地位が少しずつ確立していくとともに、忙しさにかまけて徐々に病院から足が遠のいていった。めまぐるしいタイムスケジュールと、巨大なスクリーンに流れるエンドロールに自分の名前を見つけた時の何物にも代えがたい充足感。恋愛も結婚も、健康管理も全て後まわしにして作品と向き合った。

それでも四十歳を迎えると、さすがにそれではいけない気になつて、私は数年ぶりに婦人科で検診を受けた。女性として三十代と四十代ではなんとなく年齢に対する重みが違うし、母がその病で亡くなったのは彼女が四十五歳の時だったからだ。

そして出た結果が要・再検査。痛みとか、何か目に見えて変化があったわけではない。それなのに、私のなかで細胞が変化し、病の影らしきものが確かにそこに存在しているというのは、ショックというより、どこか妙な気分だった。

それから直感的に、私はきっと母と同じ病に違いないと思ったのだ。

これまでの人生、やりたいことをやってきたと胸を張って言える。好きな仕事に就いて、国内でも海外でも行きたい場所に行った。見たいと思う景色があれば、すぐに見にいった。

早くに母が亡くなったことで、私は誰にでも等しく唐突に人生の終わりが訪れることを知り、後悔しないように生きなければならぬいと心に刻んだ。

だから、きつと他者が想像するよりもずっと、私はあつけられかんと色濃い死の可能性を受け入れていた。思い残すことがあるとすれ

ば、まだ駆け出しの頃に温めに温めた企画がボツになったのを、そのままにしてしまったことくらい。どうせなら自主制作でもいいから、きちんと自分の手で形にしたかった。

それなのに何故か、私は病院に電話をかけられずにいる。スケジュールの都合でどうとでもできるように、電話で結果を聞くことのできる病院を敢えて選んだはずなのに。今、私は相模原の桜並木の下で、幼い頃のことを思い出して桜に見惚れている。まるで感傷に浸っているみたいに。

「透とほる？ 透だよとほるね？」

ぼんやりと桜を見上げていた私は、ふいにハスキーな女声に背後から名前を呼ばれてハッとした。振り向くと、小学校からの同級生である田村美樹がエクステたつぶりの瞳をぱちぱちとしばたたかせ、こちらを見ている。

「やつぱり透じゃん！ ええ、ちよつと、やだ、すっごい久しぶり」
「わあ、久しぶり。五年ぶりくらいかな？ 美樹、全然変わらないね」

「そお？ かなり太ったよお。母乳育児で痩せるなんて都市伝説だわ。透こそ変わらないね」
照れ笑いを浮かべ、冗談まじりに返す美樹は、本当に以前と変わらない。学生の頃から明るく活発で、おしゃれで誰とでも仲良くされるようなタイプ。

彼女のデニム地のロングスカートを掴みながら、背後から幼い女の子がのぞいている。つぶらな目がママそっくりのこの子は、きっと美樹の娘の李り衣菜いなちゃんだ。ちよつどこの子の出産、育児と、私の仕事のバタバタが重なって、会えない内に気付けば五年が経っていた。

最後に会ったのは美樹に出産祝いを渡しに行った時。李衣菜ちゃんは頬を真っ赤にして力いっぱい泣く、生後間もない赤ちゃんだった。ちよつど今年の年賀状で、テーマパークでキャラクターの着ぐるみと笑顔で写る彼女を見て、成長に驚かされたばかりだ。

「ママのお友達おともだちの透ちゃんだよ。ほら、ご挨拶しな」
じつと私を見上げていた李衣菜ちゃんが、美樹のその言葉を合図に目の前に勢いよくびよんと飛び出してくる。生まれたてとは違うけれど、頬がつるりと赤い。

「はじめまして！ こんにちは！ たむらりいなです！」

「こんにちは。日南ひなみ透です。李衣菜ちゃん、とっても元気だね」
「ママがいつも挨拶はしっかりしなさいって言うの！ 小さい声だ

と『せっかく挨拶しても、そんなんじゃ相手に聞こえないでしょ』
って怒るんだよ」

李衣菜ちゃんが笑顔でハキハキとそう言えば、すぐさま美樹が「こ
ら、余計なことを言わないの」と目を細める。

「大きくなつたねえ」

「もう幼稚園の年長さんよ。すっかり女子ってかんじ。おしやべり
でおしやれが大好きで、同じクラスの何々くんがかっこいいとか、
誰それと結婚するとか、この服じゃないと着ないとか、おしやまさ
んなんだから」

「ふふ、美樹によく似てるね」

学生時代は二人でよくジャスコやダイエーに出かけ、クレープや
ファーストフードを食べながら何時間でも恋愛話に花を咲かせたも
のだ。といっても私はわりと奥手な方だったから、いつも盛り上が
るのは恋多き美樹の話がメインだった。

「ええ、そうかなあ？」

肩をすくめて苦笑する美樹に、李衣菜ちゃんが「ママだって余計
なこと言ってるじゃん！」と腰に両手を当てながら頬をぷっくり膨
らませる。子供らしい怒り方がなんとも可愛いらしい。

それからしばらくその場で思い出話や近況報告に花を咲かせてい
たけれど、李衣菜ちゃんがダンス教室のレッスン後で疲れていたこ
ともあり、美樹の車で一緒に帰ることになった。

ここから二十分ほどの距離にある相模川の河原のすぐそば、水郷
田名に私たちの実家がある。美樹は実家を建て替えて両親と同居し
ていて、私の実家とは目と鼻の先に今も住んでいるのだ。

市役所通りから上溝方面へと坂を下ると、歩道橋と高架駅の向こ
うに、幅広で奥行きのある山の稜線がくつきりと現れた。実家に帰
る度に、この景色を見ると相模原に帰ってきたことを実感する。

新宿から電車で一時間もかからないのに、この街は空が広く、自
然が豊かだ。JRの沿線や十六号沿いには背の高いビルやマンショ
ン、ショッピングモールなどの商業施設も多いけれど、この景色や、
道のそこそこにある緑は自然と近代的な人々の暮らしが共存するよ
うな場所だと思う。

「帰ってくるなら連絡してよ。ずっと会いたいと思ってたんだから」
「ごめん。急に思い立って。子育てと仕事で忙しいかなって思うと、
なかなかメッセージも送れないんだよね」

実家には新年の挨拶や何かで少なくとも半年に一度は顔を出して
いたのに、すぐそばで生活している美樹には遠慮が勝って連絡でき
なかつた。女性の友人関係は、ライフステージの変化に依存する、
デリケートなものだ。

「それは私も同じ。お互い様だね。この前、透の映画、見たよ。李

衣菜、透はね、映画やドラマを撮るお仕事してるんだよ。かつこいでしょ」

後部座席の李衣菜ちゃんに顔をひねって笑う美樹の言葉に、照れくさいような嬉しいような気持ちになる。

「ほんと？ 透ちゃん、すごい！」

チャイルドシートをすり抜けて身を乗り出そうとする李衣菜ちゃんを「危ないから、ちゃんと座ってなさい！」と窘める彼女の横顔は、完璧なまでに母親そのもの。

「美樹こそ、かつこいいいよ。人ひとりの命を産んで、育ててるんだもん」

それは、私が選んでこなかった生き方。

今どき、結婚も出産もせずに生きるのは珍しいことじゃない。同業者や知人にだって、そういう選択をしている女性は何人かいる。私自身も仕事が生きて、他のことに時間や労力を割くことは考えられなかった。恋愛は何度かしたこともあったけれど、結局自分一人の方が何かと楽だ。

実家の前で車を降りる間際、美樹に明日一日、一緒に過ごすことを半ば強引に約束せられた。

「火曜日のに創立記念日で幼稚園お休みなのよ。だからパートも休んで、一日なにしてようかなって考えてたところ。透と一緒に遊んでくれたら李衣菜も嬉しいよね？」

「うん！ わあい、やったあ、やったあ！」

今度こそ、李衣菜ちゃんが興奮気味にチャイルドシートのベルトを外すから、美樹が「ダメって言うてるでしょ！」と声を荒げる。どうせ家でぼんやりしていたって、すっきりした気持ちにはなれないだろう。それなら、この親子とともに一日くらい楽しく過ごすのも悪くないかもしれない。

「久しぶりに市役所通りの桜を見たくなくなったよね。そろそろ見頃かなと思ったし、ちょうど仕事もひと段落したところで」

父の作った肉じゃがを咀嚼しながら、私は言った。庭で父の手によって育てられた新玉ねぎは、素材本来の甘味が口の中で柔らかくほどける。

昨日、急に連絡して帰ってきた娘を、父は怪しむでもなくいつも通り歓迎してくれた。それなのについ早口に嘘をついてしまうのは、父に余計な心配をかけたくないからかもしれない。

肉じゃがは母の得意料理のひとつだった。少しでもその味に近づけようと、父が趣向を凝らして作る肉じゃがは、今では母のものに劣らぬほど美味しい。私が帰る時には、いつだって食卓には肉じゃががのぼる。

「それなら帰ってくるのは週末にしらって言えばよかったなあ。週末には満開になるだろうし、さくらまつりもやるだろう」
「いいよいいよ。さつき寄ってきたけど、じゅうぶん綺麗だった。子供の頃、お父さんとお母さんと一緒に見に行ったの、思い出したよ」

「ああ、透が中学にあがるくらいまでは毎年のように行ってたなあ。たしか、あれのなかにさくらまつりで録ったビデオも残ってるよ」
そう言って、父はテレビの方へ顎をしゃくった。透明のガラス戸のついたテレビボードには、今は再生する機器もないホームビデオのビデオテープや、私が制作に関わった映像作品のDVDのパッケージが整然と並べられている。どれも埃ひとつかぶっておらず、綺麗好きの父らしい暮らしぶりだ。そういえば、よく父は家庭用のビデオカメラで私と母を録ってくれていたっけ。

ふと目線を隣の電話台へと移すと、正月に帰ってきた時にはなかった寄木細工のフォトフレームのなか、父が数人の男性とともに浴衣姿で笑っている。どこかの旅館だろうか。赤ら顔を見るに、酒宴を楽しんでいる最中のようだ。

「ああ、それ。先週、いつもの連中と温泉行ったんだ。これも、その時お土産で買ったかまぼこだよ」

私が写真を見ていることに気付いて、父は食卓の上のピンク色のかまぼこを箸でつまんで口に運んだ。よほど良い思い出になったのか、目尻が垂れて皺が寄る。

相模原は都心にも山にも海にも、温泉地にもアクセスが良く、父もこうして度々、友人たちと連れ立って箱根や熱海に出かけていく。もともと東北出身の父は、市内に友人と呼べる存在はほとんどいなかった。私の知る限り、若い頃は田名工業団地にある製造業の会社と家とを往復するだけの毎日。それが母が亡くなって自治会の活動に積極的に参加するようになる、とても馬の合う地域の男性たちと知り合ったのだという。

親ひとり子ひとりなのに離れて暮らしていることが心配になる時もありはするものの、近所付き合いや自治会の関係が密な土地のおかげで父は孤独とは無縁でいられる。こうした友達付き合いや、地域のレクリエーション活動に自治会で参加したりと、忙しく過ごしている話を父から聞く度、いつも私はホッとするのだった。

「そういえば桜だけじゃなくて、昔は家族で色んなものを見に行きたなあ」

父がしみじみ呟いた。箸を置いて、節くれだった指で思い出を数え始める。

「花火だろ？ 鯉のぼりだろ？」きつと、すぐそばの相模川で行われる納涼花火大会や、子供の日の行事のことだ。今は鯉のぼりは見

られなくなつたそうだけど、雄大な一級河川の上を泳ぐたくさんの鯉たちも、色とりどりに咲く大輪の花々も、唯一無二の景色だった。

「懐かしいなあ。出店で買った焼きそばを食べながら、土手に座つて花火を見るのが好きだったよ。いつも『早く寝なさい』って怒るお母さんも、花火大会の夜だけは特別で」

ぶわりと、夏の夜の活気あふれる空気が胸のなかに蘇る。見上げる家族の横顔。その瞳に映る、花火の緑や赤。

懐かしさに呆けて箸が止まる私に構わず、父は思い出を数え上げる。「あと紅葉も：：そうだ、蛍も見に行つたよな」

「ええ、蛍？ 家族で見たことあつたっけ？」

「透はまだ小さかつたから憶えてないか。昔はこの辺りでも蛍を見られるところがあつて、母さんと三人で行つたことがあつたんだ」相槌を打ちつつ、記憶にないことを少し残念に思つた。人も物も多い場所に生きている限り、蛍なんてなかなか見ることはできない。昨年、蛍が登場する作品を制作した時だつて、CGで処理してもらつたくらいだ。

「今も上溝の道保川公園では蛍が見られるぞ」
「うそ、本当？」

脳内で、もはや架空の生き物みたいに蛍を勝手に神聖化して私は、思わず勢い込んで訊き返した。いくら自然が豊かだつて言つたつて、ここは人口七十二万の政令指定都市だ。上溝のある中央区はJR横浜線と相模線の二路線の電車が走り、車だつて人だつて建物だつてたくさん。この土地と蛍の存在は、私のなかでは簡単には結びつかない。

父は何か大切な秘密でも打ち明けるみたいに、そして誇らしげに「それが本当に蛍がいるんだよな」と、スマホで昨年撮つたという写真を見せてくれた。

実際のところ、ほとんど真っ暗で何が写つてよく分からない画像だつたけれど、父は小さく薄ぼんやりとした光の点を蛍だと力説する。暗く蒸す初夏の夜の公園を数十の蛍が飛び交い、求愛の光を灯していたそうだ。

きつとその公園にも友人たちと出かけたのだろうか。父の楽しそうな表情を見ている内に、胸のうちがズンと重くなつた。

これまで父は私がやりたいと言つたことに、反対したことは一度もない。母が早くに亡くなつたことで、人生の短さを痛感したのは私だけではなかつた。

堅実な会社員の父からしたら、物になるかどうか分からない世界に飛び込んでいく娘の姿がさぞ心配だつたに違いない。それでも否定も反対もせず「一度きりの人生だから」と常に背中を押してくれ

た。
そんな父に、私が母と同じ病気になったかもしれないと、好きに生かさせてくれたこの人生に終わりが近づいているのかもしれないと、どうして打ち明けることができるだろう。父を本当の意味で独りにしてしまおう。母を亡くした傷が癒え、楽しく過ごしている父の人生に、私の手で暗い影を落とす。そんな現実、私には受け止めきれなかった。

すつきりと晴れた暖かい春の日。私は迎えにやってきた美樹と李衣菜ちゃんとともに市内の小旅行へと繰り出した。

「今日は一日飽きないようにてんこ盛りのプランを考えてきたから。バタバタするかもしれないけど、覚悟して」

「慣れているから任せてよ」

「あはは、透、よく寝られないってクマ作って嘆いてたもんね」

そんな冗談を言い合っていたけれど、美樹の宣言は本場で、朝から時間をめいっぱい使って四ヶ所の施設をめぐることになった。

まず最初に訪れたのは、相模川ふれあい科学館・アクアリウムさがみはらだ。

私たちが子供の頃から運営されている施設だけれど、リニューアルしたらしくとても綺麗だ。夏には水遊びのできる屋外の広い水場もあり、今でも家族連れで賑わうと美樹が教えてくれた。

相模川の生態系を模した展示や、床に埋め込まれた水槽など、色々な展示があったけれど、李衣菜ちゃんは特に魚に餌をあげることのできる屋外の展示が好きらしい。

小さな餌の粒を手のひらに握ったまま、たくさんの魚が泳ぐ水槽に手を入れ、ぱつと開く。そうすると勢いよく魚が口をばくばくさせながら集まってきて、そのついでに「きゃあっ」と高く声をあげた。のか、李衣菜ちゃんは楽しそうに「きゃあっ」と高く声をあげた。

「毎回、餌やりするのは私は苦手で、いつも撮影係」

美樹が肩をすくめながらスマホのカメラを向ける。私も彼女と同じく、魚たちの貪欲さに圧倒され、ついで水槽に手を入れることはできなかつた。

次は、相模原麻溝公園。動物好きの李衣菜ちゃんのために、ふれあい動物広場で遊ぶ計画だという。

ヤギにモルモットに猿、豚、鳥。たくさん動物たちの飼育されている小さな動物園でも、李衣菜ちゃんは大はしやぎ。モルモットに餌やりをしたり、ポニーに乗ったり、とても楽しそうだ。

「透ちゃん！ やっほー！ そっちに悪者はいない？ 保安官が逮捕するよ！」

ゆっくり歩くポニーにまたがって手を振る彼女は、目をキラキラ

輝かせている。隣で、またはスマホカメラをかまえる美樹が有名なCGアニメの名前を出して「馬に乗ると、いつもああなの。キャラクターになりきっちゃってさ。可笑しいでしょ？」と笑う。魚の餌やりを撮影していた時も、今この瞬間も、娘を見守る美樹の姿は、幸せを絵に描いたようだ。苦笑いだって、心底おもしろくて起こる笑いだって、慈しむような光が奥底に宿っている。

そんな彼女を見てみると、こういう生き方も良かったのかもしれないと思う。子供を産み、育てる人生。母や父が、私にそうしてくれたように、誰かに生命のバトンを継いでいく人生。

こういう人生を歩んでいたら、今、私はどうしていただろうか。言葉少なにそう伝えると、美樹は「なあに、小難しいこと言ってるのよ」と私の肩を小突いた。

「あたしはそんなこと、考えたこともないよ。ただ好きな人と一緒にいたいと思って結婚して、李衣菜を産んだ。ただそれだけ」

「シンプル」

「そう、シンプル」

美樹はきっぱりと言い切った。

本当にそんなものなのかもしれない。ただそれだけのことだけど、選択しなかった道だからこそ尊く感じる。

「ママ！写真ちゃんと撮ってくれた？」

ポニーから降りた李衣菜ちゃんが、全速力で私たちに駆け寄ってきた。細く、色素の薄いロングヘアが陽光に煌めきながら風に舞う。

その様子を見ていた美樹が目を細めた。

「でもここで子育てして良かったとは思うかな。慣れ親しんだ街っていうのはもちろんだけど、こんな風に子供がのびのびできる場所や自然があつてさ。好きなことも、楽しいことも思いつきりさせてあげられる」

私も美樹も、相模原で育った。豊かに水をたたえる相模川に抱かれるような土地での暮らしも、緑も、相模原の施設も、様々な経験を私たちにさせてくれた。そのことを改めて思い出す。

そして彼女の作ってくれたお弁当を食べて迎えた午後、美樹の言葉の意味を私は再度実感することとなった。

「うわぁ、大きい……！」

私は横たわる長く巨大な二機のロケットを前にして、間延びした声をあげた。優に二十メートルを超えるであろう、鉛筆のような形の機体の重厚な存在感。ここは慣れ親しんだ街で、初めて足を踏み入れた場所。宇宙航空研究開発機構JAXA。その相模原キャンパスだ。

ロケットといえばニュースや創作物のなかで目にするくらいで、私の生活とはかけ離れた場所にあるものだった。それが、こんな風に展示され、見ることでできるなんて。

李衣菜ちゃんがそわそわとロケットの間を行ったり来たりしながら、機体に指先で触れる。その姿を見てみると、宇宙はSF映画のなかでも、この地球の遙か外でもなく、もつと身近にあるような気がしてくる。いや、身近なものにするために、人類は研究を続け、ロケットを造っているのではないかとすら思えた。

「ここにだって何回も来てるのに、李衣菜ってば全然飽きないの。放っておいたらロケットをずーっと眺めてる」

美樹が呆れたように笑いながらも、どこか嬉しそうな口ぶりと言った。

「李衣菜ちゃん、目がキラキラ。こういうの、好きなんだね」

私の幼い頃には、まったく興味をもたなかった分野だ。魔法少女もののアニメや、リカちゃん人形に夢中だった。

「旦那がロボットのプラモが好きなのよ。家にもわんさかあるんだから。捨てて言って言っても、処分するなら離婚だ、なんて馬鹿みたいなこと言ってるさあ」

美樹は今度こそ、呆れの表情を濃くする。

「ロボット？」

「うん。ガンダムね。最近、ガンダムが描いてあるマンホールが相模原に設置されて大喜びしてたよ」

「え、知らなかった。ガンダムって、あのガンダムでしょ？」

そんなに詳しくはないけれど、ものすごく有名なロボットアニメだ。私が興味津々に訊くものだから、JAXAの正門前と淵野辺駅の北口そばに設置してあることを美樹が教えてくれた。

「それでね、旦那がプラモデルで遊ばせたりするもんだから、李衣菜はロボットや宇宙に興味もつたのかなって思ってたんだけど」

美樹は続けて、「ねえ、そろそろ行くよ！」と李衣菜ちゃんに声をかける。そして名残惜しそうにロケットを見つめる彼女を眺めながら微笑んだ。

「実際はこっちだったみたい」

見学者のために開かれた宇宙科学探査交流棟という建物のなかには、見上げるほどの大きなロケットが内部構造の見える形でそびえたち、天井には吊るされた人工衛星の模型が浮かんでいた。先ほどの屋外のロケットを見るのともまた違う感覚で、グンと宇宙研究を間近に感じる。

ロケットの歴史からJAXA相模原が開発、運用しているという小惑星探査機はやぶさ2に関する展示もあった。ここにはきつと、

たくさんの人々の頭脳と熱意と知的好奇心の成果が詰まっている。美樹が金色のアルミ箔のようなもので覆われた、はやぶさ2の実物大模型を見て口を開いた。

「JAXAに来るようになったのは、ママ友に『無料で見学できる場所があるよ』って教えてもらったからなんだけど。あたし、それまでははやぶさの存在ってニュースでちらっと聞いたことあるなあ、くらいのものだったんだよね」

私だって同じだ。「分かる」と頷くと、美樹は肩をすくめる。

「ちゃんと知ってみてびっくりした。気の遠くなるような遠い星から何年もかけてサンプルを持ち帰ってくるなんて、すごいことだと思わない？」

李衣菜ちゃんのはやぶさを真似てでもいるのか、やけに真剣な顔で両腕を大きく広げてくるりと回った。その様子を見守る美樹の目は、どこまでも優しい。

「そして今も宇宙を旅しているはやぶさ2を支えている人たちが私たちの地元、相模原にいるって、すごく誇らしいことだよ」

「本当。私も今日、ここに来て、宇宙とかロケットとか、そういうのが好きな人の気持ち初めて分かった気がした」

「でしょ？ 李衣菜もJAXAと博物館のおかげで宇宙の虜になつたみたい」

「博物館？」

美樹の言う博物館というのは、道を挟んで向かい側にある相模原市立博物館のことだろう。

「そう。よし、そろそろプラネタリウムを見に行こっか」

美樹の言葉に、李衣菜ちゃんが嬉しそうに満面の笑みでびよんと飛び跳ねた。「わあい、プラネタリウム！ 透ちゃん、隣に座ってね！ 一緒に見よ！」と、ねだるように言っただけの手を握る。小さくて柔らかくて温かな手。その感触に、一瞬、何故だか胸が切なくなつて、それからさすがに穏やかな気持ち湧きあがってきた。

私と美樹は、李衣菜ちゃんを真ん中にして三人で手を繋いで駐車場まで歩く。

二機のロケットの先では、どっしりたたずむ桜の木が陽だまりのなかに花びらをひらひら舞わせていた。まるで、この季節を謳歌しているかのよう。

相模原市立博物館は私が学生の頃にできた博物館で、校外学習でも来たことがある。当時も今も、プラネタリウムの大きなドーム状のスクリーンいっぱい映し出される全天周映画は見応えがあり、新鮮だった。

暗がりのなかで隣の席の李衣菜ちゃんを盗み見れば、夢中で食い

入るようにスクリーンを見つめている。その様子が可愛らしくて、自然と口角が上がってしまった。

上映が終わり、私は美樹と李衣菜ちゃんに導かれるままに館内を見学した。マンモスの頭骨から縄文土器、この辺りの自然や街の移り変わった様子まで幅広く展示されている。なかには上溝の変化を表わした地図もあって、美樹と今はなくなってしまった写真館で卒入学の記念撮影をしたことや、学生時代に訪れた個人商店の話で盛り上がった。

それから私たちはプラネタリウムの先にある天文展示室へと足を踏み入れた。ここはこの博物館のなかで、李衣菜ちゃんが一番のお気に入りらしい。実際に触れることのできる隕石があったり、はやぶさについての展示があったりと、宇宙が好きな彼女にまさにぴったりの場所。

しばらく興味深そうに隕石をペタペタと触ったり、撫でてみたり、顕微鏡を覗き込んでいたかと思えば、今度は私の手を掴んで展示室の奥へと進んでいく。

「透ちゃん、あっち行こ！早く、早く！」

「あ、ちよっと待って」

「走らない！透も困ってるよ！」

美樹の制止も聞かずに、李衣菜ちゃんが私を連れてきたのは光るアーチの先、天井まである大きなモニター画面の前だった。部屋の突き当りの壁一面がモニターになっていて、周りを鏡が囲んでいる。

「見て、すごいよ！」

そう言って李衣菜ちゃんが壁のスイッチに手をかざすと、目の前のモニターいっぱいには鮮やかな光が映し出された。前にインターネットで目にしたことのある、ハッブル宇宙望遠鏡の撮影した天体写真だ。耳心地の良いメロデーとともに、ゆっくりと映像が切り替わっていく

乳白色、赤、緑、青、どの色も鮮やかで眩く、見つめていると吸い込まれそうな気分になる。雲のようなもの、渦巻きのようなもの、様々な形状の現実のものとも思えない星たちの光。

「ね？すごいでしょ？宇宙を飛んでいるみたいだね！」

私の手を握る李衣菜ちゃんの左手に力がこもって、ハッとすると、

「うんうん、すごい、綺麗だね」と答えると、彼女は満足げに笑った。

本当に、まるで宇宙船にでも乗っているようだ。SF映画の主人公たちは物語のなかで宇宙船の窓からこんな景色を見ているのかもしれない。何度もワープを繰り返しながら、この息をのむほど美しい星々の海を旅していくのだ。

「李衣菜、宇宙飛行士になりたいんだって」

気付くと、隣に美樹が立っていて、モニターを見つめる彼女の瞳に銀河の光が反射している。

「将来の夢。年少さんの時から、ぶれずに七夕の短冊に書くの」

「あっ、それ、今、李衣菜が言おうとしたのに！ ホントにママって余計なこと言う！」

頬を膨らませて、子供らしく拗ねる李衣菜ちゃんが可笑しくて、思わず大人ふたりで顔を見合わせて笑ってしまった。それから「ごめん、ごめん」と苦笑して、美樹が言葉を続ける。

「うちらが子供の頃は周りに宇宙飛行士が夢っていう女子なんていなかったじゃない？」

「そうだね。小さい頃は特にケーキ屋さんとか、お花屋さんとか、可愛いイメーজの職業を夢にする子が多かったかも」

「でしよう？ 今どき、女の子らしいとか男の子らしいとかってないけどさ、最初はびっくりしたもん。急に宇宙飛行士になりたいって言いだして」

それを聞いた李衣菜ちゃんが誇らしそうに胸を張って「絶対絶対、大きくなったら宇宙飛行士になって宇宙人と一緒に遊ぶんだ！」と大声で叫ぶ。それを「他の人の迷惑になるでしょう！」とたしなめて、美樹はまた笑った。

「なんか良いよね。私、李衣菜が最初に宇宙飛行士になりたいって言った時、嬉しかったんだ。不景気だ、少子化だなんて、世の中、息苦しいことも多いじゃん。それでも、でっかい夢をもててさ」

李衣菜ちゃんがその夢を抱くことができたのは、きっとこの環境が大きいのだろう。幼い頃から宇宙というものに触れることで、自然と生まれた好奇心。宇宙が身近な相模原に生きるからこそ、きつと彼女はまだ見ぬ星に生きる命を、自分の目で見たいと望むのだ。

李衣菜ちゃんの大きな夢に、燃えるような生命力を感じる。それは、このハッブル望遠鏡の写す、赤く爆ぜる雲のような光。

「うん。すっごく良いね」
「なんだかジーンとして嘔みしめるように言うと、美樹は「だよね」

と歯を見せて言う。
「夢は大きい方がいい。きつと叶うよ。李衣菜ちゃん、私も応援してるからね」

「ありがとう！」
李衣菜ちゃんが私の腰にぎゅっと抱きついてくる。その温もりに、検診の結果を見た瞬間から心を覆っていた靄が払われていくのを確かに感じた。

「映画監督なんて、でっかい夢を叶えた透が言うんだから間違いないわ」

子供の頃、愉快なことがあるといつもそうしていたように、美樹

が私の背中を強く叩いた。

家に帰ると、父がテレビボードの前で腰をかがめて何やらゴソゴソと作業をしているところだった。

「ああ、おかえり。ちょうど良かった。これ、さつき、友達から借りてきたんだ」

「ただいま……って、ええ、急にどうしたの」

父の手元で道具箱ほどの長方形の機械が、赤黄白、三色の端子を覗かせている。映像の記録媒体がDVDやブルーレイ主流になってから、久しくお目にかかることのできなくなっていたビデオデッキだ。何故、こんなものを借りたのか。

「昨日、色々と家族で出かけた話をしただろう。久しぶりに透と一緒にホームビデオでも見ようかと思ってな」

「それでわざわざ？ ビデオテープからDVDに映像を移すこともできるんだし、こんな大きくて重いもの借りてこなくても」

「いいから、ほら、繋ぐの手伝え」

つい色々と言葉をついでしまう私に、父がオーディオケーブルを差し出してくる。ああだこうだ言っても、もう借りてしまったものは仕方がない。私は液晶テレビの裏側を覗き込み、端子にケーブルを差し込んだ。

父がいそいそと日本酒を入れたグラスを運んでくる。ふと見ると、父のポロシャツの胸に、今日何度か目にしたJAXAのロゴの刺繍がしてあった。

「どうしたの、それ」

「前に見学に行った時に売店で買ったんだ。なかなかいいだろ」

聞けば、父もひとつきに一度はJAXAに足を運んでいるらしい。今ではすっかり宇宙にハマり、いくつになっても学ぶことは楽しいと言う。父もまた、この街が宇宙を身近にしてくれることを、誇らしく思っているのだろう。

「うん、よく似合ってるよ」私が笑えば、父はちよつと照れくさそうにはにかんだ。その様子が微笑ましくて可愛いけれど、そんなことを言ったら怒られるので心にしまっておく。

私の幼稚園のお遊戯会や、クリスマススのホームパーティー、動物園に行った時のものや、海水浴をしているもの、相模川の河原でのバーベキュー、花火大会。父は本当に家族の時間をたくさん記録してくれていた。再生された映像には元氣だった頃の母の姿や、まだ幼い私、そして撮影している父の声が入っている。

懐かしさに浸っていると、「お、今にちょうどいいな。花見に行った時のがあるぞ」と、父が一本のビデオテープを再生した。当時の家庭用ビデオカメラは今ののように小型化しておらず、一キ

ロ以上はあったはずだ。それでも性能的に仕方のない手振れはあるものの、父はあまり大きく揺らすこともなく、ほとんど安定した画で、私と母、そして訪れた場所の風景を写していた。

ところが、今見ている映像は青空を映し出したかと思えば、桜の木や地面に敷かれたレジャーシートへと視界が大きく揺れ、移り変わる。

「どうしたの、これ。操作ミス？」

私が再生を停止させようとリモコンに手を伸ばすと、父が「いいから」と遮った。

「透は憶えてないよな。これは透が初めてビデオカメラで撮った映像だ」

「そう、だっけ……」

映像は続く。桜の木々から、吹雪のように舞い散る花びら。うしろの景色から察するに、横山公園の桜だ。そうだ、私たちは毎年、市役所通りだけじゃない。桜がたくさん咲く横山公園や鹿沼公園に花見に出かけていた。

レジャーシートの上には、母が作ったお弁当が並ぶ。私が好きだった母の鯉節と醤油を混ぜ込んだ茶色いおにぎりや肉じゃが、父の好物の唐揚げ。それをひよいっとつまみ食いして、茶目つけたつぷぷりに笑うのは、いつもはホームビデオに姿の映らない父だ。母が『まだいただきますもしていないのに。透が証拠をおさえましたよ』と、カメラ目線で笑う。

母と画面越しに目が合った。病床の痩せ細った母とは違い、肌には張りがあり顔色も良い。粗い映像でも、はつきりとそれが分かった。

『ね、透』

母は撮影者である幼き日の私に呼びかけたのに、どうしても今、私を呼んでいるような気がしてならない。どうしようもなく、きつく胸が締め付けられた。

映像のなかの父が母を愛おしそうに見つめながら微笑んでいたかと思うと、『見なかったことにしてください。そうだ、透、あとでこっすりお菓子を買ってやろう』などとカメラに向かって目配せをした。それに『やった！』と私が声をあげ、カメラがまたぐいと空を仰ぐ。

真っ青な空と満開の桜。その映像に『こら、目撃者を買収しないの』という母の笑いを堪えるような声が入ってビデオは終わった。私は画面をじっと見つめたまま、しばらく動くことができなかつた。

「そうか、そうだった……」

唇から、勝手に言葉が滑り落ちる。

たった数分足らずの映像に、私たち家族の幸福のすべてが詰まっ

ていた。私が初めて撮りたいと思った瞬間。私が本当に撮りたいと思ったもの。間違いなく、これが私の夢の原点だ。身体の奥底から抑えることのできない衝動が溢れ出して、私は勢いよくソファーから立ち上がった。「ごめん、ちよつと散歩してくる」そう言い残して、早足で相模川へと向かう。ほんのりと冷えた夕暮れ時の風が、そつと頬を撫でていった。

子供の頃から、私は相模川の土手に横たわって空を仰ぐのが好きだった。周りに大きな建物もなく、視界を群青色の空だけが覆いつくす。橋を渡る自動車の音と川の水音。ここにいると、まるで空にゆったりと浮かんでいるような気分になれる。何十年ぶりにそうしてみても、昔と同じように自然は私を包み込んでくれた。

先ほど見た映像を思い返す。あれはまだ私が李衣菜ちゃんと同じくらいの年齢だった頃。子供ながらに温かく、楽しい家族の時間を映像に撮りたいと思った。だから父にせがんで操作方法を教えてもらい、初めてカメラを持たせてもらったのだ。

物語を考えるのが好きだったことと、ああして撮りたいと思ったものをカメラにおさめたこと。それが、映像作品の制作に携わりたいたいと思っただけか。あ、あのビデオを見たことで、今、はつきりと思いつくことができた。身体が熱く震える。

「生きたい！ 生きたいよ！」私のもっと生きて、作品を撮り続けたい。そして観る人の心に、少しでもいい、光を灯したい。

紛れもない本当の気持ちと一緒に遠くに流れていった。空に向かつて投げた言葉は、水音と一緒に遠くに流れていった。

これまでずっと私は物分りの良いふりをして、強い自分を演じていたのだ。母が死んだことで、本当はなによりも死を恐れるようになったのだ。だからこそ、遺伝の可能性を受け入れたような顔で自分に嘘をつき、検査結果も出る前から直感なんてものを言い訳に見て見ぬふりをした。

病院に結果を聞きに電話することができなかったのは、心の底では生きたいと強く望んでいたから。恐くて、死の可能性を受け止めることができなかったのだ。

ほとぼしる李衣菜ちゃんの生命力と大きな夢、幼き日の私の情熱、そしてこの土地。そのすべてが私を丸裸にして、生きたいという気持ちと奮い立たせた。

結果を知るのは、まだ怖い。それでも自分自身のために、明日を生きるために、本当に私が撮りたいものを撮るために。私は向き合

う覚悟をしなければならぬ。

どんな結果であれ、受け入れよう。

まだ時刻は六時前。病院はきつとやっている。私はスマホのロツクを解除して、病院の電話番号をタップした。

季節がめぐり、また春がやってきた。

私の構えるカメラの中で、岡本太郎の赤い手青い手の彫刻と満開の桜並木を背景に李衣菜ちゃんと美樹が手を繋いで歩いている。

「ねえ、こんなんの良いのお？」

美樹が訝しげに訊いてくるのに、私は「ばっちり」と親指をたてて笑った。李衣菜ちゃんは我関せずで楽しそうに桜の花びらをキャッチしようとして飛び上がる。

あれから私は市役所通りのそばにマンションを買い、相模原に戻ってきた。結局、私のなかにできた腫瘍は良性のもので、定期的に診察を受ければ現状は命に関わるものではないそうだ。

取り越し苦労もいとどこだけだ、おかげで自分の本当の気持ちちに気付くことができたのだから、これはこれで良かったのだと思う。

そして私は仕事を続けるかたわら、いつか撮りたいと思い続けていた企画を、今、自分の手で撮っている。美樹は「娘が宇宙飛行士になる前に女優デビューしちゃった」なんて近所に自慢しているらしい。

私がずっと撮りたかったのは子供の頃に初めて撮ったビデオのような、温かい愛情に溢れた映画。仕事と並行しながらの制作だけれど、どれだけ時間がかかってもきつと完成させてみせる。

この先、生きていけば壁にぶつかることも、危機に直面することもあるだろう。それでも私は、ここでならちゃんと自分らしく、自分自身を見失わずに生きていける。

これは私が作る、私だけの、私のための物語だ。

了